

Title	アブッシュ著 道家忠道・成瀬治訳 ドイツ：歴史の反省
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.8 (1956. 8) ,p.601(51)- 605(55)
JaLC DOI	10.14991/001.19560801-0051
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560801-0051">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560801-0051</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

であるが、いわゆる程単純ではない。マンハイムは、イデオロギーの分析を徹底すると共に、近代科學の宿命を打破してゆく一つの方向を指示しそれを推進した。ついで(9)科學的過程。ヴィジョンならびに研究の手筈を説明する。イデオロギー的要素は、一體どこに入りこむか。又これを排除しうる方法は何か。その爲には科學的過程そのものの分析に向わなければならない。まず分析に先立つ認知活動がなければならぬ。この分析以前の認知活動をヴィジョンと名づける。このヴィジョンは、定義の上から殆どイデオロギー的である。このヴィジョンによつて科學は、そのモデルを作る材料を與えられる。従つてイデオロギーの除去は困難である。以上第一篇の説明を終つたわけであるが、之を單なる第二編以下の準備段階であると考へてはいけない。そこには、シュムペーターの社會科學に對する見解が展開されている。

第二編發端から第一次古典的状況に至るまで(およそ一七九〇年に至るまで)、第一章ギリシヤ・ローマの經濟、ギリシヤのプラトン、アリストテレスの二人が主として論じられている。ついで古代ローマの狀態が説明される。第二章のスコラ學者と自然法の哲學者では、歴史の連続性という點が強調されているしかも徹底的である。封建的經濟世界から資本主義的經濟世界に轉形しうるためには、人々が全く新しい事物の考へ方を抱かねばならなかつた筈であるという意味での資本主義の新精神なるものは存在しなかつた。封建時代の社會には、資本主義時代のあらゆる萌芽が含まれていた。これらの萌芽は緩慢な速度で發育し、その各々のステップはそれに應ずる方途を教へつつ、資本主義的「精神」とを少しばかりずつ濃

厚にしていつた。十五世紀の末には、今日われわれが資本主義なる漠然たる言葉に結びつける慣わしとなつてゐる現象の大部分が出現した。その資本主義的企業の生成は事業所における仕事から生ずる新しい精神慣行を生ぜしめた。そしてこの種の考へ方が漸次あらゆる分野に浸透した。この結果のなかで最も重要なものの一つは、教會外の知識人の出現従つてまた教會外の科學の出現であつた。教會は、之等の人々の存在自體に對して反對する理由はなかつたし或る種の人々に對しては、寛大なバトリオンでもあつた。教會自身古典的研究を奨励した。スコラ哲學も教會外科學のあらゆる萌芽を包含していた。十六・七世紀の教會外の學者は、スコラ哲學の仕事破壊するよりむしろ繼續したのである。以上の敘述によつてもわかるように誠に明るい中世である。ルネッサンス、宗教改革の意義はどういうことになるか。歴史の連續とはこのような一本線であることを果して意味するか。「自然法の概念」は、誠に興味ある課題である。しかしシュムペーターの敘述は明確を缺いている。アリストテレス—古代ローマの人々例へばガイウス、ウルピアヌス、ケクロ—聖トマス—モリーナと一應自然法の系譜とその性格の變遷はのべている。そして「自然法と社會學的合理主義」という問題が論じられている。自然法の考へ方は、後世の科學に大きな影響を與えていた。しかし中世の自然法と近世の自然法更には現代における自然法の解釋は、異なるものである。この點の相違就中神の侍女である理性と人權の確立とか個人主義の場合における理性との相違とその變遷の過程はどのようなものであつたか。思うに、シュムペーターは、「分析の歴史」において、ユートピア的要素をなるべく排除しようと努

力したのではないか。實踐が理論より先であるということとは、被創造者という人間存在そのものの根本的な辨證法的な構造からくる。しかしそのことは、身が心より先であるとか精神から離れて、肉體を考察することではない。自然法が連續的に發展する爲には、新しい意味が内から興えられなければならない。あたかも古い革袋の中に新しい酒が盛られるように。第三章は、行政顧問官と時事問題小冊子について述べられている。重商主義の時代である。(原書は、Joseph A. Schumpeter, "History of Economic Analysis", edited from Manuscript by Elizabeth Booddy Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954, pp. XXV+1260 である。)(A5判、四三八頁、七五〇圓、岩波書店)

(山部 徳雄)

アブッ シュ著

道家忠道・成瀬治譯

『ドイツ——歴史の反省——』

「日獨兩國民が戦わなければ、

世界戦争はおこらない」

ナチス・ドイツがついえ去つてから十年、われわれは再び新しいファシズムの脅威を身じかに感じようとしている。世界史にも稀な

書評及び紹介

あのいたましい體驗にもかかわらず、われわれの世界は軍備擴張を一刻もやめようとはせず、水爆戦争の危険は去つたとはいえない。とりわけ、祖國日本はドイツと同じく、世界が平和の方向に向うか、それとも再び戦争に轉落するかの岐れ路に立つて、その鍵をにぎつてゐるように見える。これが、われわれにとつてさけることのできない現實である以上、われわれが、そのおかれた世界史的な地位について深く省察することはもちろん必要であるし、とりわけ再びあの悲劇をくり返さないためにも、われわれの悲劇の原因が、何に由来するものであるかを、深刻に考へることは、一層必要であろう。最近における日本近代史の研究が、いちじるしい進歩を記録したのも、現在の日本がおかれてゐる複雑微妙な立場、ともすれば運命的なものとして觀念しがちなこのゆううつな状態——いうまでもなく植民地的從屬と政治の腐敗墮落——を歴史の流れのなかにしつかりと把握し、どうしたらこの状態から脱却することができるかという切實な要求が、廣く國民大衆のなからわき上つてきた結果にほかならない。

二つの世界に分割され、日本の場合よりも一層深刻で悲惨だつたドイツでも、近代史研究への氣運が非常にたかまつてゐると考へられる。たとへば、寡聞な筆者の眼にふれたものでは、例のクチンスキーのドイツ帝國主義にかんする大著(Jürgen Kuczynski; Studien zur Geschichte des Deutschen Imperialismus. 2 Bde. 1949.)やドイツの經濟的發展にかんする勞作(Die Bewegung der deutschen Wirtschaft von 1800 bis 1946, zweite durchgesehene und erweiterte Auflage, 1948.)そして更にロードウヰム・

ブレラーの力作「ワイマール共和国における社會政策」(Ludwig Preller: Sozial Politik in der Weimarer Republik, 1949.) などは代表的なものであろうが、そのほか、ハウル・ワンドルの著作 (Paul Wandel: Der deutsche Imperialismus und seine Kriege-das nationale Unglück Deutschlands, 1955.) やオットー・ヤン・シュエの著作 (Otto Winzer: Zwölf Jahre Kampf gegen Faschismus und Krieg, 1955.) なども注目すべきものである。

だがここに紹介するアレキサンダー・アブッシュのドイツ——歴史の反省——(原著は「一國民の迷路」——Der Irrweg einer Nation) はこのような著作とならんで、ドイツの歴史をその精神的背景において理解した點で、たとえあのフリードリッヒ・マイネッケの「ドイツの破局」(Friedrich Meinecke: Die deutsche Katastrophe—Betrachtung und Erinnerungen, 1946.) と同じような敘述の方法をとっているが、しかしアブッシュはマルクス主義者であつて、マイネッケの宿命主義とは鋭く對立する。

二

譯者のまえがきによれば、著者アブッシュは、一九〇二年、南ドイツの古都ニュルンベルクの労働者街で生れた。商店に働きながら、早くから文學や歴史に親しみ、一九一八年の革命前から反戰運動に参加したというから、生れながらの革命家であつたわけである。やがてテューリンゲン地方の黨機關紙、ノイエ・ツァイトウングやローテ・フアーネなどの共產黨機關紙の主筆として活躍し、勞

働者の闘争を指導して幾度か大逆罪に問われたが、一九三三年ヒットラーが政權を掌握するや、反ファシスト運動をつづけ、とくに第二次世界大戰の勃發とともに地下運動に入り、一時フランス政府に捕えられたが、のちにメキシコにわたり、「自由ドイツ」誌を出して反ファシスト運動に従事した。現在はドイツ民主共和国の文化省にあつて、要職についている。従つて彼が専門の歴史家でも思想家でもないことは、ほとんど獨學であつたことからも明らかで、それにもかかわらず、この書が多くのドイツ人に讀まれ、フランツ・メーリングの「ドイツ史」に比せられたことは、著者の學識の深さと、豊かな思想とをあらわすものといわなければならぬ。

この書はつぎの九章と著者のあとがきとから成つてゐる。すなわち、第一章 一國民の未完の姿、第二章 プロイセン主義の本質、第三章 ドイツの自由のための二つの試み、第四章 アブッシュの社會主義について、第五章 ドイツ人の《内なる王國》、第六章 ドイツ帝國主義の再度の試み、第七章 ヒットラーにいたらないでもすんだ道、第八章 ヒットラー——野獸性の夢と現實、第九章 ドイツ人の責任、四年後——著者のあとがき、である。

アブッシュはヒットラー主義の野獸性の萌芽を、遠くさかのぼつてプロイセン主義のなかに見出ししている。すなわち云う。「十七世紀は、プロイセン國家の誕生と同時に、あのプロイセン主義の發展をもたらしした。その精神は、ヒットラー時代に残酷な軍國主義精神と、またしばしばドイツ精神と同一視された。實際『プロイセン主義』は、ナチ精神の強い——しかしむしろ唯一——といえぬが——反動的な源泉であつた。プロイセン主義の歴史的發展と、二十世紀の

戰爭にいたるその作用をのべることは、ドイツの謎をとく——唯一といえぬが——鍵の一つである」と(三〇頁)。またつぎのようにも云つてゐる。「反動的なプロイセン主義の軍國的性格は、大資本家トラストの近代ドイツ帝國主義にいよいよ侵略的な調子を加えた……ドイツの不幸と國民的破局から生れたプロイセン主義は、三百年のうちに、ドイツの最大の不幸と最深の國民的破局の道ならしとなつた。プロイセンの支配階級は、ドイツがついに身のほどを知らぬ軍國主義と帝國主義の悲劇的・犯罪的發展に追いこまれたことに山盛り一杯の責任をもつてゐる」と(三二頁)。ではアブッシュは、プロイセン主義の本質について、どのように規定しているだらうか。彼によれば、その政治的本質が有する根本的特徴を、つぎの三つにわけてゐる。まず第一にそれは、東方スラヴ民族への侵略であり、ブランドンブルクIIプロイセン國は、その土地貴族としてのユンカーを中心として、東方進出の望みをすてなかつた。はるか十三世紀の昔から彼等はそれによつて、土着のスラヴ民族を征服し、スラヴ農民を農奴にかえてしまうことを夢にも忘れなかつた。ここにはちに十八世紀フリードリッヒ二世によるポーランド分割として現われたプロイセン國家の軍事的侵略的性格の第一の特徴が存する。そしてヒットラーもまたこのフリードリッヒを最良の教師とした。プロイセン主義の政治的特徴の第二は、ユンカーの國であることである。そして第三に反ドイツ的な傳統である。十七世紀、三十年戰爭の結果、荒廢したドイツは、三百六十五の小王侯國の單なる集合という支離滅裂な連邦となつてしまつた。そしてこのようなときに、プロイセンは、このドイツ帝國の犠牲の上に、強國として浮び上つ

てきた。そしていわゆるフリードリッヒ大王のときに、ヨーロッパにおけるプロイセンの地位を固めたのだが、しかし、「プロイセンの政策は、フリードリッヒ二世以後の世紀においても、けつしてドイツの國民的統一にはむけられず、いつも無骨に單純に、領土の掠奪そのものへとむけられた」のである(六一頁)。

アブッシュは、以上のように、プロイセンの政治的本質を三つにわけて、そのナチスにつながる性格を分析しているが、しかしプロイセン主義の反動的な性格を打破しようとして努力したもつとも勇敢な人物として、シュタイン男爵をあげてゐる。十八世紀のドイツは、ゲーテやシラーの時代であるとともに、アレキサンダー・フォン・フンボルトやカール・フォン・シュタインなどのすぐれた頭腦を生み出した。シュタインはプロイセンの大蔵大臣としてはげしくしみを買いながらも、恐れるところなく、絶對主義の政治的無能を攻撃した。「彼は自分の背後に、動く力としての、また彼自身を動かす力としての人民階級をもつていなかった」のだが、とにかく一八〇七年十月九日、農民の世襲隷屬性と農奴制撤廢の勅令を出したのである。アブッシュは、進歩的改革主義者としてのシュタインの業績を高く評價すると同時に、やがてメッテルニッヒの反動的な政策をこれと對比させる。シュタインがプロイセン主義IIユンカー支配に反對する急進的な自由主義者であつたとすれば、メッテルニッヒはまさに、ユンカーの利益の代辯者であり、シュタインがドイツ統一を企圖する民族主義者であつたとは丁度逆に、ドイツを分裂の状態におくことによつて、オーストリアの國家的存立を保とうとした。こうして十九世紀初頭のドイツは、進歩と反動的の絶えざる闘争があ

り、革命をおしすめようとする勢力とこれを阻止しようとする勢力の衝突は、次第にはげしくなつていった。一八四八年のいわゆる三月革命は、フランス、オーストリア、ポーランドなどにおこつた一連の革命的な騒ぎの一環をなすもので、ここにドイツにおけるブルジョア革命は成功するかに見えた。「一八一五年以來、『三十三年の隸屬』のうちにもつた人民の革命的エネルギーが、ここに爆發したのである」(九二頁)。

だが結局それは、『裏切られた革命』として、失敗に終つた。「ブルジョア貴族の自由主義的君主主義的サークルの態度は、妥協へのあこがれ、反動に對する公然たる武装闘争の結果への恐れ、労働者への不信に動かされてきた。労働者の独自の經濟的要求を、彼らは、シュレジエンの織工の暴動以來恐れ、ことに、ヨーロッパの政治的地平線にもプロレタリアートの影が威嚇的にたち上つてきた。パリの二月革命以後は、なおさら恐れていた『共產主義の幽霊』がさまよいはじめた」(九五頁)のである。

ドイツ農民戦争以來、最初の革命であつたこの三月革命は、何故に敗れなければならなかつたか、アプッシュはつぎのように云う。第一に、富裕になつたブルジョアジーが、人民との共同戦線よりは、王や貴族との妥協を選んだことである。第二に、プチブルと農民よりなる民主黨が、時機を逸せず徹底的な大膽な行動に出る肚をきめなかつたこと、そして第三に、若い労働者階級の力は、ドイツの一般的な民主的闘争の指導を考へるには、當時まだあまりにも弱かつたことである(一〇一頁)。こうして一八四八年の革命の失敗は、反動勢力に長くその勝利を約束し、來るべき二十世紀において、ドイツ

國民はこの反動勢力と對決しなければならなかつた。

三

一八四八年以後、第一次世界大戦勃發までのドイツは、いわゆるビスマルクの時代にはじまり、ヴィルヘルム時代につながるドイツ資本主義の最盛期であり、黄金時代であつた。ユンカー出身の獨裁者ビスマルクは、一方において労働者階級の運動をおさえ、他方自由主義者を骨抜きにすることによつて、ドイツの民主化をはばむため、あらゆる手段をとつた。すなわち彼は、三つの方策によつて労働運動に對處した。すなわち第一に、一八六三年五月以來ラッサールと結ぶことによつて、第二に、社會主義鎮壓法によつて、そして更に第三に、上からの社會保險制度によつてである(一二五頁)。

このようにして、ビスマルクの『プロイセンの社會主義』は、労働運動の奥深く入つていった。アプッシュは、つぎのように云う。「フリードリッヒ二世とビスマルクとは、プロイセンの反革命、プロイセン的反社會主義の生んだ二人の立役者であつた」と。要するにビスマルクの社會政策とフリードリッヒ二世の侵略政策こそ、ヒットラーによつて完成されたものであり、獨占資本の走狗であつたヒットラーが彼等から多くのものを學んだことを力説している。

アプッシュのこの大著は、ドイツ・ファシズムの成立を、その精神史の背景において把握したものである。唯一のものであり、貴重なものではあるが、ドイツの労働者階級運動の發展と後退について、とりわけその特殊性について、あまりのべられてはならず、思想的

な點からのみ考察されている感がある。

ここにこの著作の限界が存するよう思う。

(飯田 鼎)

明礬取引小史

明礬は中世のヨーロッパで貴重な品とされ、東方からの輸入に負つた。脱脂と染色のため織物工業でかなりの需要があつた。

成立期の織物工業については豊かな研究史に恵まれる。しかし原料が如何にして調達されたかについて研究は多くない。生産の過程において必要となる明礬に關して全く觸れられなかつたのも止むを得ない。しかし最近披見した論文 Marie-Louise Heers, "Les Génois et le commerce de l'alun à la fin du moyen-âge", Revue d'histoire économique et sociale 1954 No. 1, pp. 31-53. は研究史のこの空白を埋めてくれる。以下はその紹介である。主産地である東方で明礬を採掘したのは誰か、また誰が販賣を擔當したかについて記述しているので興味深い。

二

明礬坑は東方の各所に散在し、ジェノア出身の商人が獨占していた。ジェノア人の植民地にある嶺山について見れば、先ずフォーケ

坑が目立つ。東方で最大のもので、十三世紀末以來最初ツァカリア家の獨占であつた。次いでその没落後はカタネオ・デラ・ヴォルタ家の獨占となつた。しかし既にカタネオ家による單獨の獨占ではなく、ほかにサルヴェーゴ家とドリア家が獨占に加わり、十四世紀に早くも組合が成立していた。ところが一三四〇年フォーケ坑はトルコ人により占領され、壊滅的な打撃を受けた。一三四六年ジェノア商人は本國から船隊の救援を得てその奪回に成功した。戦費を調達したこれら商人の間で組合が結成され、フォーケ坑と附近の明礬坑は以後この組合の支配に屬するようになった。但し本國商人がこの組合に参加したのは一四二四年以降で、組合に屬する商人から権利の移譲を受けることによつてであつた。

特定家族による獨占から共同へというこの動きは、トルコ領やギリシャ領内深く進出して明礬坑を請負つたジェノア商人の間でも見られる傾向であつた。この種の動きはマルマラ海の諸島の明礬坑で活躍したジェノア商人の場合特に顯著であつた。

組合は直接に採掘に當つたわけではなく、採掘権を競賣に付すか、直接に採掘に従事する業者のために融資するかであつた。明礬は山元で買却された。そして他の商人が輸出を擔當した。しかし販賣もジェノア出身の商人の獨占であつた。例えばロメリニ家。ロメリニ家はペラ、ブルージュ、ジェノアに一族の者を常駐させ、家族的結束によつて販賣網を擴大して行つた。ペラの駐在者はフロレンス織物工業に供給される明礬を扱つた。ジェノアの駐在者の手でスペイン、イギリス、フランス向け積荷が整理された。ブルージェの駐在者はフランスでの販賣を引受けた。ジェノアの駐在者がただ一